



香奈編の1話～若妻の匂い

塔南交通のタクシードライバー本田幸一は、空車で国道一号線を京都市内に向けて走らせ京都南インターのラブホテル街の信号待ちをしていた。信号が青になりアクセスを踏むと同時に右側から信号を無視して白いクラウンが突っ込んできた、そして本田のタクシーの前に無理矢理割り込んできた。

本田はこんなことは日常茶飯事で別に気にも止めなかったが、そのクラウンのナンバー2345を見た。本田は昭和23年4月5日生まれ、この2345の昇り数字が好きでキャッシュカードの暗礁番号にしている他、宝クジのナンバーズでもこの数字を買い続けていたがまだ一度も当たってはいない。

白いクラウンと本田のタクシーは京都市内に入り、西大路通りを北に上がり西大路花屋町の交差点で白いクラウンは赤で突入、本田はその手前で信号待ちをした。その信号を渡ったところで白いクラウンの左ドアが開きサマーセーターとミニスカートの女が降りて歩道に立った、女は本田のタクシーに大きく手を上げて乗車した。

行き先は西京区の桂坂で結構遠い、この狭い京都で2000円を越える客は稀にしかない、本田はラッキーと思いタクシーを走らせた。女は25～6歳で色気たっぷりの若妻の匂いがする、本田は若妻の匂いなど知らないがなぜか風呂上りの匂いを感じ取ると若妻を想像していた。

バックミラーで盗み見する顔は白くて広い額に知性を感じるが冷たさはない、ツンと高い鼻には気品が宿っているような超美形。桂坂の超高級住宅街の一番山の手の街区にこの若奥様の邸宅があり、山崎一樹の表札がある玄関にタクシーを着けた。

タクシー料金は2750円、本田は250円のお釣りを左手に持ち振り返ると若妻は左足を外に出した瞬間だった、

「お客さん、ありがとうございました。お釣りです」

というと、若妻は顔と右足だけを本田の方へ向けて、

「運転手さん、とっといてください」

左足は外にでているからミニスカートが上にまくれ上がり長くて白い脚がハの字150度開脚になった。本田は「ありがとうございます」と言うが目が点になっている。素足の真っ白い脚の突き当たりは真っ黒なシルクのパンティー、それも超ハイレグで股の部分から上は透け透けの生地で細い陰毛が押さえられて影絵の花のように妖しく咲いていた。時間にすれば250分の1秒ほどだったが本田の目にはしっかり焼きついていた。

本田は勤務を終えて午後7時ごろ南区八条のさほど広くない建売住宅に帰った。妻の美砂子は上機嫌で息子はラグビー部の合宿、娘はこの秋結婚する婚約者の実家に泊まることなどを話している。久しぶりの夫婦2人だけの夜に美砂子は何かを期待しているようでウキウキしているようだ。本田が先に風呂に入ってビールを飲んでいると美砂子が太い身体にバスタオルを巻いて風呂から上がって本田の前を通り過ぎた瞬間、昼間乗せたあの若妻の匂いを思いだしていた。本田は妻に、

「なあ～お前、ハイレグのパンツ持っているのか？」

美砂子は「お父さん～なにあってんの～」と照れ笑いしながら奥の娘の部屋に入った。

しばらくすると妻が娘の部屋から甘い声で「おとうさん～」呼んでいる。もう何年かぶりに娘の部屋に入ると照明は暗く落とされ目がなれてからベッドの美砂子を見ると娘の黒のスケスケブラジャーと黒の超ハイレグスケスケパンティーを履いて横たわっていた。

本田は娘のベッドに飛び乗り美砂子の太くて短い足を左右に150度開きその突き当りを見た！。これだ！正にこれだ！昼間見た若妻とまったま同じとはいかないが、いや！それよりもっと卑猥だ！なんせ手入れをしていない陰毛を隠し切れずにパンツからはみ出て艶かしくうごめいていたからだ。

本田の妻へのいつものセックスは指で秘部をまさぐってそれで少し濡れてきたらペニスを挿入、ほんの2～3分で出すだけだして妻へのいたわりのカケラもなかったが、今夜はその美砂子が愛しくいつもの5倍の時間をかけて秘部を口と舌で愛撫していた。

黒のスケスケパンティー事件から1ヶ月がたったある日、本田のタクシーはいつものように京都市内を流していた。金閣寺から南へ下がり西大路花屋町の信号で止まった。その横には見覚えのある白いクラウンが駐車している、運転席には品のよい老人がチョココンと座っている。大きな車なのでその老人はよけいに小さく見え、顔が痩せているためか鼻が異様に大きく見えた。

信号が青になり本田は念のためにルームミラーでナンバーを確かめた。「23-45」えっ！やっぱり超美形の若妻が乗っていたクラウンだ！そ、そうか～あんなお爺さんだったのかとなぜか胸を撫ぜ下ろしていた。

本田の頭の中にはラブホテル街から飛び出してきた、黒のスケスケハイレグ＝不倫と想像していたが、頭の硬い本田は不倫は犯罪だと思っていた。いや、それより自分自身がしたくともまだ経験がないので他人の不倫には「妬み・嫉妬」が相当勝っていた。

しかし、何か気になるので少し先で停車してこの白いクラウンの様子を見ていた、しばらくすると個人タクシーがクラウンの後ろに停車して女が降りてすぐ前の白いドアに消えていた。そして勢いよく発進したが本多もあわてて追跡をしている。その追跡されているクラウンの車内では、

「香奈、今日もきてくれておおきに」

「いなじい～何いうてんねん、香奈はいなじいが死ぬまでお付き合いさせてもらうといってるやん」

「ほんまに可愛いことをいいよる～おおきにおおきに」

「こちらこそいつも無理ばっかしゆうて、もし、いなじいに会わなったら香奈は欲求不満で死んでます」

「わしかて香奈に会わなかったら今頃ボケてしまって寝たきり老人になっいまっせ！」

「そなん、それはまだ早いわ～」

「わしは若い頃から苦勞して老けてしまいうていつも75～80歳に見られる。ほれこないだも香奈と2人で河原町を歩いてたやろ、知った人にいっぱい会ったが誰も怪しまへん」

「そらそうや～いなじいと香奈は何も怪しいことはしてへんもん」

「香奈、わしも男やで～」

「あら、それはお若い、ほなら今日も楽しみやん！でも忘れんといてね香奈はヒ・ト・ツ・マよ～」

「わかっている、人妻と不倫するような奴は死刑にせんかったら世の中ようならん」

白いクラウンは名神高速の南インターラブホテル街のラブホテル「赤まんま」に堂々と入った。その後を尾行してきた本田のタクシーもワンテンポ遅らしてからホテルに入ると白いクラウンは部屋の前の駐車場にバックをしていた。若妻と爺が入った部屋は206号室で部屋の名前は「貴船」、時間は午後1時50分と手帳にメモしていた本田の頭の中は錯乱していた。

老人と若妻の不倫、金目当ての売春、欲求不満の解消、いや何かが違う、しかし、ラブホテルに入ったことは間違いがない、あの老人とセックスをするのか？それ以外なにがある？本田はたった1回しか逢っていない若妻に恋をしたのか？いや違う、正式には一瞬見た黒のスケスケシルクの超ハイレグのパンティーしか頭になかった、それに恋をしていたのだった。

ホテルに入ったいなじいはすぐに真っ裸になりバスルームに入るとシャワーで軽く浴槽を洗い湯をためていた。その間にシャワーで自分の身体を丹念に洗い終わったころ香奈は真っ裸で入ってきた。

いなじいは香奈の背中から尻までシャワーで軽く流してから2人で浴槽につかり身体が温まったところに香奈を助平椅子に座らせ背中をスポンジで丁寧に洗っていた。

「いなじい～気持ちがいいね～」

「はいな～生きててよかったというのはこのことやったんや～」

いなじいはシワクチャの顔をさらにシワクチャにして大笑いしている。爺は香奈の前に移動して首から乳房へと手をせわしく動かしている。香奈の目の前には白い毛の中に隠れるほどの小さないなじいのペニスがブラブラしている。香奈はそっと手でつかみひっぱり口を近づけて舌でペロペロしていると、

「これ！香奈、三助の邪魔をしないで！」

と怒ると香奈はペロッと舌を出して「ごめん！」

香奈、はい立ってといなじいがいうと、香奈はスラリと伸びた両脚を肩幅ぐらいに広げて、「いなじい、もう何度もいっているけど、ソコは旦那様以外は見ても触ってもいけないところなの！ただ洗うだけよ～」

「はいはい、ここは旦那様のものですからただ洗うだけです」

とはいいいながらもいなじいは別に目を閉じることもしないでスポンジにボディーシャンプーをつけて香奈の陰毛から割れ目の微妙な突起物、大陰唇を左手で起用に広げて右手でスポンジの端を利用して綺麗に洗っていた。香奈を浴槽に浸からした後はいなじいが先に風呂から上がって自分の身体を拭いていた。

そして香奈が風呂から上がってくると首から乳房、背中から尻へとバスタオルで丁寧に拭いている。いなじいは香奈の右脚を椅子にかけさして秘部が見えやすくしてから少し濃い目の若草から割れ目と丁寧に拭き上げると香奈はバックから黒のスケスケシルクのパンティーを取り出して

履いている。

このラブホテル「赤まんま・貴船の間」は、部屋の壁4面と天井までの総ガラス張りで、丸くて大きなベッドが回転するようになっている。照明もテレビスタジオ風で薄い生地のパンティーなら中を透き通すほど明るい。いなじいも香奈もこの部屋が大好きでイナジイなどは香奈とデートの日は前日から予約するほどだった。

香奈は白い肌に黒いパンティーだけをつけて仰向けになるといなじいは真っ裸で香奈の右の乳房を吸いながら右手で左の乳房を指で刺激していた。

香奈の右手はスケスケのパンティーの中にはいりこみ、指で香奈の最も感じる小粒の真珠を押したりひっぱったり摘んだりしている。天井のカガミにはいなじいのしわだらけの背中と香奈のパンティーの中の白い手がいやらしい動きをしていた。香奈の口からは、

「あっあああああ、あっあっあっあああああ」

と漏れ出したところを見はらかっていなじいは香奈のパンティーの上から秘部をまさぐっていた。それを感知して香奈は自分の手をパンティーから出していなじいのペニスを触るがまだそのままのようだった。

いなじいの指はパンティーの上から感じる部分を探しだしてはそこをしつこくせめているが、この爺の手は香奈のパンティーの中には入れないという掟があった。一度パンティーの一番細い部分から指を入れようとしたがその瞬間に香奈はガバツ！と起き上がり、

「いなじい！そこは旦那様以外は絶対触ってはいけません。香奈はいなじいと不倫をする気はまったくありません」

とビシャリ！と言われてからは一切その素振りはみせていないが、風呂での行為は洗うという行為で不倫ではないというのが香奈の考えだった。

いなじいのハンドパワースペシャルテクニックで香奈は、

「アツツツアアアア〜」から「イッイイイ〜イイイイイ〜」

そして、「クッククク〜フッフッフ」と「ク」と「フ」を交互に漏らし始めるとイキたいの合図になっているから、いなじいは一気にイクポイントを攻めて香奈を楽にしてやった。

いつもそうだが、いなじいはこの香奈の歓喜でゆがんだ「イキ顔」を見ると、ペニスには徐々に血が回り始めてゆっくり起き始める、これを待ってたように香奈は逆さで上になりいなじいのペニスを口にくわえた。

(2話につづく)

★～私の小説で自己破産をテーマにしているのがあります。これは主人公を女性にしていますから少しH系ですが、自己破産までの流れが書いてありますから参考になります。とりあえずは裁判所に走りこめば今月からの返済はストップできますから自殺というような最悪のことはなくなります。ぜひ、読んでください。

長編小説「京都フラワーランジェリー物語」

<http://p.booklog.jp/book/16636>

短編小説100連発

<http://p.booklog.jp/book/16691>

老人と性「京都タクシードライバー・さくら」

<http://p.booklog.jp/book/16816>

7人の天使の恋～美雪編の1話

<http://p.booklog.jp/book/16980>

7人の天使の恋～早苗編の1話

<http://p.booklog.jp/book/17421>

☆☆☆～音川伊奈利の小説の総合案内は、

<http://p.booklog.jp/users/sakura64>